

3 インクルーシブ教育の現状と課題

ー新型コロナウイルス感染症流行下における交流及び共同学習の推進ー

◎松田愛理子、○高橋正子、岩崎弘、西川裕子

共同研究者 富永光昭 教授（大阪教育大学 特別支援教育部門）

（要旨）

本校では、インクルーシブ教育システムが提唱される以前より、多くの交流教育や「交流及び共同学習」の取り組みを行っている。本ユニットはそのような実態を踏まえ、地域の学校園と「共にインクルーシブ教育を築く」為に、附属特別支援学校として何ができるのか、現状と課題を明らかにすることを目的とし研究を進めてきた。新型コロナウイルス感染症の流行もあり、現在は「交流及び共同学習」の実践において、新しい形での実践の検証及び推進が求められている。今年度は全3回の交流及び共同学習をオンラインで実施した。

本論では、その内2回の実践についての概要の説明と、実践後にA小学校の担任の先生方と本校の授業担当者を対象に行ったインタビュー調査の分析結果を報告する。これらの結果から、オンラインでの「交流及び共同学習」についての課題や、本校が「交流及び共同学習」についてセンター的機能を発揮できる可能性、新たに「キャリア教育」の観点を含めた実践の可能性が示唆された。

（キーワード） インクルーシブ教育、「交流及び共同学習」、オンライン、キャリア教育、新型コロナウイルス

I. 研究目的

本校では、インクルーシブ教育システムが提唱された「障害者の権利に関する条約」の批准（平成26年）以前より、「障害者の社会参加」や「障害理解」、「共に学ぶことの大切さ」等をキーワードにあげ、多くの交流教育や「交流及び共同学習」の取り組みを行ってきた。平成25年度には、文部科学省より「インクルーシブ教育システム構築モデル事業」の研究を受諾し、「附属平野五校園」の連携において、「交流及び共同学習」の実践研究を行った。平成29年度には、「インクルーシブ教育推進のための交流及び共同学習について」研究チームが、文部科学省研究委託事業「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解の推進事業（以下、心のバリアフリー事業）」に採択され、その取り組みを全国の特別支援学校に発信した。研究実践以外にも、各学部において様々な相手との交流活動が行われている。

本ユニットは、そのような背景を踏まえ、これまでの本校での実践をまとめることや、関西での現状調査、「交流及び共同学習」に関する質問紙調査等を通し、「インクルーシブ教育の現状と課題」を明らかにしようとしてきた。

1年次の研究では、これまでの本校の取り組みを踏まえ、相互理解の不十分さやコミュニケーションの足りなさといった課題や、事前事後学習の充実や間接交流の有効な活用等、活動内の検討が必要であること等が明らかとなった。また、同じ活動を長期間継続して行うことの難しさ、担当教師の変更や教育課程の見直し等に伴い、交流形態の変更を余儀なくされてしまうケースがあることも判明した。

2年次の研究では、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、調査研究を中心として実施した。関西においては特別支援教育の重要性が高まっていることや、「交流及び共同学習」が多く実施されているにも関わらず、理解が十分に広がっているとは言えないこと、「協働性」「障害理解」に関して関心が高いものの、「教育課程」に関してあまり着目されていないこと等が判明した。本校と交流している学校園を対象としたアンケート調査では、多くの学校園が「交流及び共同学習」を意義あるものとして受け止めているものの、ただ実施するだけでなく継続的・定期的な交流を行うことが重要であると感じていることも判明した。また、新型コロナウイルス感染症の流行を受け、安全面に配慮した「交流及び共同学習」の実践の検討も必要であると考えられた。

それらを踏まえて、今年度は地域の学校園と「共にインクルーシブ教育を築く」為に、研究校である附属特別支援学校として何ができるか、という観点に新型コロナウイルス感染症の観点を追加し、「新型コロナウイルス感染症流行下における交流及び共同学習」について検討し、インクルーシブ教育の現状と課題を明らかとすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 実践

今年度は大阪市内のA小学校と大阪府立江之子島文化芸術創造センターにご協力をいただき、本校中学部と

オンラインでの「交流及び共同学習」の全3回の実践計画を立てた。本論文では第1回目及び第2回目の実践について述べる。A小学校は今年度本校中学部に入学した生徒Aが昨年度まで在籍していた小学校の特別支援学級である。

(1) 日時

- 第1回目：令和3年7月8日（木）10：50～11：35
- 第2回目：令和3年10月14日（木）10：50～11：35
- 第3回目：令和4年2月10日（木）9：50～10：35

(2) 対象

- 第1回目：本校中学部1年生、A小学校支援学級在籍児童5・6年生
- 第2回目：本校中学部美術1班(卒業生生徒含む)、A小学校支援学級在籍児童5年生、
大阪府立江之子島文化芸術創造センター
- 第3回目：本校中学部1年生、A小学校支援学級在籍児童6年生

(3) 方法

Z o o mを活用してのオンライン交流

(4) 内容

- 第1回目：自己紹介、質問コーナー、ゲーム（しりとり）等の交流
- 第2回目：自己紹介及び美術作品の対話型鑑賞
- 第3回目：学校紹介（事前撮影したビデオ使用）、ゲーム（連想ゲーム）

2. 実践後調査

(1) 調査方法

2回の実践後に交流相手校の教師と本校の実践担当者を対象に質問紙調査を実施した。またその結果を踏まえ、オンラインでもインタビューを実施した。インタビュー調査の実施時期は、2021年11月。参加者は、交流相手校授業担当者（2名）、本校授業担当者（2名）、司会者（本ユニットメンバー1名）。

(2) 分析方法

インタビューで得られた逐語録に含まれる単語（以下、語）を抽出し、その出現状況から今回オンラインで実践した交流及び共同学習についてそれぞれの学校でどのように受け止めているのか等を検討した。

本研究ではKH Coder を用いて以下の分析を行った。

- ①逐語録に出現する語を計量的手法により抽出・整理。頻出した語（以下、抽出語）の出現傾向を検討す。
- ②抽出語について共起ネットワーク分析を行い、そこで得られる文脈から本実践及びオンラインでの交流及び共同学習について検討。
- ③コンコーダンスを使用し、抽出語が出現している文脈を検討。

Ⅲ. 結果

1. 本校におけるコロナ下における「交流及び共同学習」の実践

新型コロナウイルスの影響を学校教育が受け始めてからすでに2年の月日が経つ。突然の全国一斉休校やコロナ下において安全に配慮した授業実践等、この2年間例年以上に工夫をし、授業実践を行ってきた。本校では、本校版の「新型コロナウイルス感染症対策マニュアル」を作成し、社会情勢に合わせ改正をしつつ対策を行ってきた（本論文執筆段階でVer. 13）。本校では令和2年度には、対面での「交流及び共同学習」は行わず、オンラインを使用した「交流及び共同学習」を実践した（図1）。



図1 令和2年度の本校のオンライン「交流及び共同学習」

ICT機器を使用してオンラインでの「交流及び共同学習」を小学部や高等部で試行的に実施した。本校はGIGAスクール構想以前より、ICT機器の導入を積極的に行い、日常の授業でもICT機器を活用した実践に取り組んできた。そこで蓄積したノウハウや新たに学んだことを活用し昨年度は「交流及び共同学習」に取り組んだ。

これらの実践では、時間的な利便性や、発表時の視線の焦点化等利点が見いだされた。同時に、オンラインの設備が十分に揃わないと実施が難しいことや、インターネットへの接続や音声のトラブル等もあり、改善点も多く判明した。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行を受け、学校教育における様々な教育活動が制限される中、「交流及び共同学習」を実践することができたことは、本校の児童生徒の学びの保障にもつながり、意味のある実践となった。上記の他にも多くの課題があり、また昨年度の本ユニットの研究実践(松田ら、2021)で上がった教育課程の課題や継続した活動等を踏まえた実践を検討していく必要があることが分かった。

2. 令和3年度の「交流及び共同学習」の実践

今年度は中学部でA小学校の特別支援学級と、大阪府立江之子島文化芸術創造センターにご協力をいただき、「交流及び共同学習」の実践を2回行った。これまでの研究成果(松田ら、2021)や本校の研究主題を踏まえ、事前学習の充実や、キャリア教育の観点からも実践を計画した。特に交流相手校の教師との連絡を密にし、多くのミーティングを実施した。

(1) 第1回目の交流

第1回目の実践に関するねらいを「小学校卒業生と在校生との交流を通じて、コミュニケーションを深めることで、互いの様子や良さを知り、学び合う場とする」とことと「オンラインを通して、他校の児童・生徒と一緒に楽しく交流すること」、「会話の中で親睦を深める」とことと設定した。特に1回目は初めての実践ということで、「交流を楽しむ」という観点を重点的に計画した。事前学習では、各校同じスライドを使用して、全体の流れを説明し、同じフォーマットで自己紹介カードを作成した。

当日は、パソコン画面の後ろに読み原稿を置いて話すことで、前を見て発表できているように映り、成長した姿を相手校に見てもらえることができる等、オンラインならではの利点があった(図2)。今回の交流及び共同学習で最も盛り上がりを見せたのが、交流が終わってからの時間である。児童生徒共に、緊張がほぐれたのか、自由に会話し、コミュニケーションを取る様子が見られた。対面での交流よりどうしても距離を感じてしまうオンラインでの交流の中で、より自然なコミュニケーションの場となっていると感じた。

本校及び相手校のアンケートでは、交流及び共同学習に対し前向きな意見が多く見られた。相手校の児童や教師からは進路に関するイメージがもてたという意見があがった。



図2 交流で発言する様子

(2) 第2回目の交流

第2回目は、第1回目のねらいに美術の要素を加え実施した。事前学習では、A小学校では、絵を見て感想を述べる練習を事前に何度も行い、当日はとてもスムーズに発表することができた。府立江之子島文化芸術創造センターの方に対話型鑑賞のポイントを的確に提示していただき、事前の練習の成果もあり、児童生徒は自分の考えを発表することができた。オンラインの工夫(図3)として、複数のカメラを使用して多角的に子どもたちの姿を映し出すことで、絵のどこを指さしているか等が明確に伝わった。しかし、時間が限られ全員に発言を促すことが難しかったため、活動内容に合わせ人数設定を工夫する必要があると感じられた。事後アンケートでは、絵画の鑑賞や、交流についての前向きな意見が多くあがった。



図3 オンラインの工夫

3. 実践後調査

(1) 質問紙調査

実践後に、A小学校支援学級の担任教師と本校の実践担当者を対象に質問紙調査を行った。質問調査では「①授業の目標」「②実際の子どもの様子」「③授業のねらい」「④環境の設定」「⑤教材設定と教師(集団)の指導性」「⑥授業改善」の観点についてそれぞれ下位の質問項目について自由記述を中心に質問を設定した。また後日行ったインタビュー調査では、これらの質問に対する回答を掘り下げる形で実施した。

(2)インタビュー調査

①語の出現結果

インタビューの逐語録はA小学校授業者の発言と本校ユニットメンバーの発言に分け、記述されている語の出現状況について分析を行った。KH Coderによる前処理の語の整理として感動詞、副詞、未知語、名詞Cを抽出外とし、強制抽出する語の指定として「生徒A」「話」、使用しない語の指定として「中」を設定した。また、同義の言葉を同語として抽出されるよう「子」「児童」「生徒」等、児童・生徒を指す言葉を「子ども」に統一した。

以上の設定を踏まえ、A小学校授業担当者の発言の分析対象として、総抽出語数 5,815 文字（異なり語数 788 文字）、文 190、段落 116 が抽出された。本校の発言の分析対象としては、総抽出語数 7,035 文字（異なり語数 892 文字）、文 208、段落 141 が抽出された。A小学校と本校の発言における頻出した 20 語をそれぞれ表 1 に示す。

表1 A小学校・本校ユニットメンバーの20語の出現数

A小学校授業者の頻出した 20 語の出現数				本校ユニットメンバーの頻出した 20 語の出現数			
思う	52	授業	10	思う	60	学習	16
子ども	45	出る	10	交流	37	生徒A	15
言う	19	難しい	10	子ども	30	時間	14
交流	17	話	9	話	27	設定	14
感じ	16	学級	8	感じ	20	難しい	14
学校	14	使う	8	今回	20	感じる	13
オンライン	11	大阪	8	オンライン	19	支援	13
時間	11	コロナ	7	学校	19	メンバー	12
今	10	教室	7	先生	18	事前	12
支援	10	小学校	7	本校	18	活動	9

②共起ネットワーク分析

A小学校の発言及び本校ユニットメンバーの発言を共起ネットワークに示した（図4、図5）。

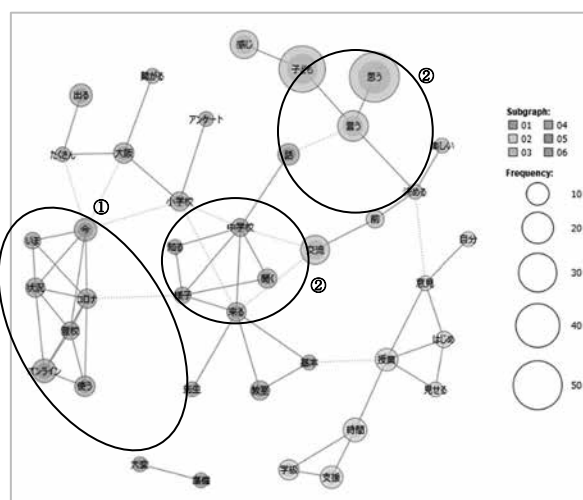


図4 A小学校の共起ネットワーク

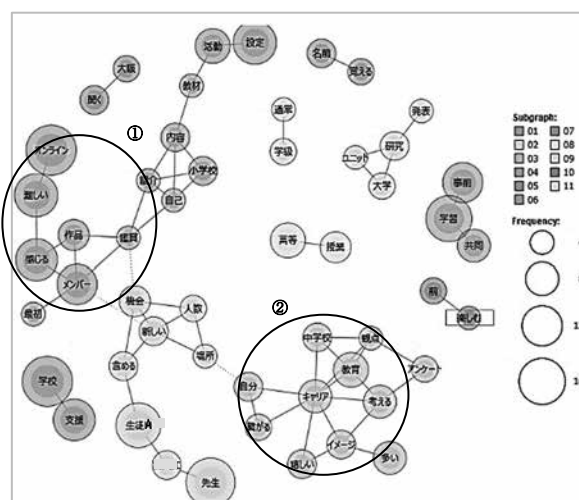


図5 本校ユニットメンバーの共起ネットワーク

A小学校の共起ネットワークの結び付きについて述べると、「子ども」と「言う」「思う」「感じ」「決める」が結び付いていた。「授業」と「意見」「自分」「はじめ」「見せる」「時間」、「来る」と「中学校」「様子」「知る」、「準備」と「大変」、「オンライン」と「コロナ」「登校」「使う」「状況」、「大阪」と「小学校」「たくさん」「出る」が結び付いていた。

本校の共起ネットワークの結び付きについて述べると、「オンライン」と「難しい」「感じる」「メンバー」「作品」が結び付いていた。「キャリア教育」を中心に「教育」「中学校」「観点」「アンケート」「考える」

「自分」「繋がる」「嬉しい」「イメージ」、「生徒A」と「先生」「〇〇（交流相手校の教師）」「含める」「新しい」「機会」「新しい」「人数」「場所」、「学校」と「支援」、「学習」と「事前」「共同」、「通常」と「学級」、「前」と「楽しむ」が結びついていた。

2つの共起ネットワークより、抽出語をグループに色分けし、特徴的なグループをカテゴリーとした。カテゴリー分けにはコンコードダンスを使用し、適宜どのような文脈で現れたかを確認した。

A小学校の発言の傾向（表2）としては、本研究のメインでもある「オンラインの実施」に関しては「不登校児への支援」として使用しているものの、日常的にはあまり学習には使用していないことがわかる。現在のオンラインの現状として、繋がりにくさや準備の大変さ等改善が必要なことは述べつつ、手軽に交流できることや、移動がないこと、その分危険性も少ないこと等のメリットも指摘されている。「交流に関して」は卒業生である「生徒A」も参加したことで、初めての活動でも、楽しく活動できたことや、次への活動に意欲的に感じていること、中学校の様子を知るきっかけになるのではないかという意見もあった。

表2 A小学校の発言によるカテゴリー

カテゴリー	コンコードダンス（一部）
①オンラインでの実施に関して	<ul style="list-style-type: none"> ・不登校の子どもとオンラインでやる ・集会やるときにはオンラインでやったりはしたんですけど、あんまり学習では使っていない ・オンラインの状況をね、根本的に変えないとそこに関しては難しいかなって思います ・オンラインのメリットではありますね。その手軽さと言うか、準備は大変かもしれないけど、子どもを動かすほうが多分ね、もっと大変やから、それと比べるとね、準備、カメラ準備してオンライン繋げてぐらいのことが大人だけで済む話やから、そこはいいのかもしれないですね。危険も少ないですね
②交流に関して	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒Aがいてることですごく、あの、距離お近づいたのかな、交流できたのかなと思います ・6年生は、あの初めて交流させてもらって、えとまあコロナがおさまっておちついたら、来てねって言ってくれたことをすごく覚えているみたい ・3学期になんかこうちょっと中学校の様子とかわかるような交流ができたらいいいねって話をしていた ・教室とか、あの図工室、作業室だったりだとか、給食はこんなところで食べてるよとか。そのなんか、小学校との違いが、ライブ中継みたいな感じで紹介してもらえたら

本校ユニットメンバーの発言の傾向（表3）としては、「オンラインでの実践」に関して、色々取り組みをしているものの、トラブルも多くあることや、難しさを感じていること、同時にコロナ禍での学びを継続する可能性が示唆されている。また「キャリア教育」に関して、子ども自身が交流を通してイメージを持てたこと、また本校生徒に関しても、自身のキャリア選択の振り返りにつながっていたことが指摘された。

表3 本校ユニットメンバーの発言によるカテゴリー

カテゴリー	コンコードダンス（一部）
①オンラインでの実施に関して	<ul style="list-style-type: none"> ・オンラインが身近に、こういう状況で日常的にね、使えたらと思って、本校でもいろいろオンラインの取り組みはしているんですけど、トラブルも多くて、中々難しいなっていうのは、感じているんですけど ・オンライン楽しいし、あの気軽にね、やれるようになったところもあるけど難しいところもあって ・オンラインの交流の取り組みはコロナ禍でその学びを継続してやるためのパイプになればいいかなと
②キャリア教育に関して	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたち自身が学びの中からキャリアで設定して教えられるんじゃなく受け取って、自分たちがこういうふうになるんだとかイメージをね、特にプラスのイメージを持ってくれるってすごく嬉しいことだなって思っていて ・生徒A自身も自分の進路選択の振り返りじゃないですけどそういったところも含めいろんなことがキャリアにも繋がっていたなとちょっと感じまして

それぞれ共通して、オンラインでの実施に関して難しさや課題を挙げるだけでなく、安全面や手軽さ、

現在のコロナ禍での学びの保障等の観点から、十分なメリットがあることが挙げられている。オンラインでの実践に関し、課題は多くあるものの、事前準備及び活動の工夫により、より充実した「交流及び共同学習」となり、今日の教育的な課題を解決する糸口となることが示唆された。

また、A小学校では交流に関して生徒Aを介したことで、本校に対しより親しみを感じ交流することができたことがわかる。また、卒業生の進学先ということで、教師の意図以上に、子どもたち自身が自身の進路やキャリアという観点を意識し、次の活動へ意欲を持つことができたことも判明した。本校にとっても、生徒Aの進路決定を振り返る機会となり、キャリア教育につながる活動となることも示唆された。

IV. 考察

1. コロナ禍における交流及び共同学習に関して附属特別支援学校のセンター的機能

今回の実践では、A小学校を卒業した本校生徒Aをきっかけに、交流及び共同学習を行った。今回の実践ではこれまで本校でのICT機器やオンラインを使用した教育活動の実践で培った技術と知識を活用し、地域の小学校であるA小学校との交流及び共同学習を企画した。無理なく継続的に行えるよう活動を考慮し、両学校間の連絡や情報交換を密にしながら計画や活動を進めることができた。また第2回目の実践で府立江之子島文化芸術創造センターの方が機器の設置面でもファシリテーションをとってくださったことで充実した活動になった。そのことを踏まえ、本校での実践で培ったノウハウを、近隣の学校に提供し、共に新たな「交流及び共同学習」の形を築いていくことで、地域全体の教育活動が活性化され、児童にとっても幅広い体験を得、視野を広げることで、豊かな人間形成に資することに繋がるのではないかと考えられる。コロナ禍の中、GIGAスクール構想も前倒して開始し、ICT機器や、オンラインを活用した授業実践が全校で求められている。本校の人数制という利点と、潤沢な機材を生かし蓄積した知識や技術を、地域の学校に伝えることで、附属特別支援学校としてのセンター的機能を果たすことができ、それが「共に協力してインクルーシブな教育現場を築く」為に附属特別支援学校としてできることに繋がっていくのではないかと考えられる。

2. 「交流及び共同学習」と「キャリア教育」の関係性

今回は「交流及び共同学習」に「キャリア教育」という観点も含めて内容を検討し実践してきた。インクルーシブ教育システムで求められている「連続した学びの場」という観点からも、同世代との交流及び共同学習だけでなく、本校で以前より取り組んできた、異年齢や別の校種との交流及び共同学習にも重要な役割を果たすと考えられる。実際に、中学校に対し不安を感じている児童にとって、短い時間でも進路先になりうる学校との交流を行うことで不安を軽減することができたことが交流の事後アンケートからも明らかとなっている。様々な行事が中止となり、学校間の行き来が難しい中、オンラインでの交流及び共同学習を通してのキャリア教育には大きな意味を持つと考えられる。本校の生徒にとっても、自身の進路選択を振り返る機会となり、また年長者として交流学習を進行する姿を母校に見せる等、受け身の交流ではなく、生徒が主体的に取り組むことができる場となった。今後更に地域の小中学校との交流及び共同学習へと繋げていくことで、本校が附属特別支援学校として地域に貢献し、インクルーシブ教育の推進に寄与できる形を今後も検討していきたい。

V. 謝辞

本研究を行うにあたり多大なご助力をいただいたA小学校支援学級の先生方、大阪府立江之子島文化芸術創造センターのスタッフの皆様にご感謝申し上げます。

VI. 引用・参考文献

- 1) 末吉美喜 (2019) : テキストマイニング入門—Excel と KH Coder でわかるデータ分析—。オーム社。
- 2) 松田愛理子・高橋正子・岩崎弘・西川裕子・西田怜奈・富永光昭 (2021) : インクルーシブ教育における「交流及び共同学習」の現状と課題—附属特別支援学校としての教員養成の視点から—。大阪教育大学附属特別支援学校 紀要, 2, 57-63.
- 3) 守巧・若月芳浩 (2021) : 中堅教諭・熟練教諭が捉えるインクルーシブ保育について—フォーカスグループインタビューの調査から—。こども教育宝仙大学 紀要, 12, 29-36.
- 4) 文部科学省 (2012) : 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進 (報告) 概要。
- 5) 文部科学省 (2019) : 交流及び共同学習ガイド。